

トルコ・シリア大地震と国際緊急援助隊

東京理科大学総合研究院火災科学研究所教授 博士（工学） 小林 恭一

トルコ・シリアの国境付近を震源とする大規模な地震が起きた。日本も即座に国際緊急援助隊を派遣するなど、大規模な国際支援も行われているが、建物倒壊が凄まじく、死者数が5万人を超えるなど今世紀最大とも言われる大きな被害が出ている。本稿では、この地震と国際緊急援助隊について考えてみたい。

トルコ・シリア大地震

地震は、今年（2023年）2月6日早朝4時17分頃（現地時間）、トルコの首都アンカラの南東約600kmに位置するGaziantep ili Nurdağlı（ガズィアンテプ県ヌルダウ）付近で発生した。地震の規模はM7.8で内陸型地震としては非常に大きく、震源の深さは18kmと比較的浅かった。さらに9時間後に少し北に離れた地域でM7.5、深さ10kmの地震が発生した。このため、ヌルダウとその周辺の広範な地域で多数の建物が倒壊し、早朝で寝ていた人が多かったこともあり、多くの人が瓦礫の下敷きになった。死者数は、3月初めの時点で、トルコ国内4万5,000人以上、シリア国内6,000人以上などと報道されており、現時点でも東日本大震災（2011年3月、M9.0）の死者・行方不明者数（2万2,000人余）をはるかに上回っている。

国際緊急援助隊の派遣

今回の地震では、地震発生当日（2月6日）の夜、日本政府の国際緊急援助隊・救助部隊の先遣隊18名（うち消防5名）が第1陣として派遣された。

翌7日には第2陣56名（うち消防12名）が派遣され、合計74名の大部隊となった。国際消防救助隊の内訳は、消防庁1名、東京消防庁6名、福岡市消防局及び広島市消防局各3名、茨城西南広域消防本部、徳島市消防局、上越地域消防事務組合及び宮崎市消防局各1名となっている。

被災地が首都から離れているため、先遣隊は7日の朝にイスタンブールに到着し、そこからさらにカイセリ（カッパドキアの玄関口として知られている）まで飛び、そこでトルコ災害緊急事態対策庁と協議して、活動地域がカフラマンマラシュという人口116万人の町に決まった。その後、カイセリから150km以上の距離を陸路移動して現地に入った。

先遣隊の活動サイトは市内の倒壊した9階建てアパートとされ、7日の夜9時40分に救助活動を開始。その日（7日）の深夜11時40分頃瓦礫の下敷きになった2人を発見し救助したが、いずれも死亡が確認された。

先遣隊は、その後も救助活動を続け、翌朝にはサイトを変えて救助活動を行っている。8日夜には第2陣が到着して先遣隊の隣のサイトで救助活動を始め、以後、合同して、14日に撤収するまでカフラマンマラシュで活動を続けた。

残念ながら、今回は、日本チームは生存者を救出することはできなかったが、11日の午後2時過ぎに、隣接する現場で活動していたトルコチームが女兒を救出。日本の救助チームの医療班が女兒を診察し、発災後130時間ぶりの生存救助に一役買った（以上消防庁発表資料）。

それにしても、羽田を発って30時間余りの間に、空路・陸路の大移動の後、休みも取らずに救助活動を行って成果を上げるなど、国際緊急援助隊の皆さんのタフさと士気の高さには、本当に感心する。マスコミではあまり大きく取り上げられていないが、彼らの活躍は日本人として大いに誇りにしてよいことだと思う。

国際消防救助隊事始め

国際緊急援助は、海外で大規模な災害が発生した場合に、被災国政府または国際機関からの要請に基づいて実施される事業である。

国際緊急援助隊には、国際消防救助隊が属する救助チ

ームの他に、医療チーム、感染症対策チーム、専門家チーム、自衛隊部隊の5種類の援助区分がある。国際緊急援助隊は、「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」に基づいて、外務大臣が派遣を決定し、各省庁や医療機関、国際協力機構（JICA）などが実務部隊を派遣する仕組みとなっている。

この国際消防救助隊と国際緊急援助隊の草創期のことについては、今では知る人も少なくなったので紹介しておきたい。

私の知る限り、消防の国際緊急援助のきっかけは1985年9月のメキシコ地震（M8.0、死者9,500人以上）に始まる。この地震の際に現地で医療活動にあたった山本保博先生（本誌編集委員、当時日本医科大学教授）が、帰国後関根則之消防庁長官を訪ね、「先進国の国際救助隊は救助チームと医療チームが共同して行う編成になっている。日本も消防の救助チームと医療チームが合同で国際救助隊を編成すべき。」と申し入れを行ったことが端緒になって、消防庁で国際緊急援助の検討が始まった。当時、日本の経済力は世界経済を圧する勢いだったのに、国際緊急援助も満足にできないのか、と内外から批判されていたことも大きかった。

その直後の1985年11月、コロンビア共和国のネバド・デル・ルイス火山の噴火で大規模な泥流災害（死者2万3,000人以上）が起き、外務省から消防庁に救助隊派遣の打診があった。消防庁と各消防機関はこれに積極的に応えることとして準備を進めたが、結局、同国からの要請がなく派遣には至らなかった。これを直接のきっかけとして、1986年3月に、各消防機関の職員を国際消防救助隊員として登録する仕組みが整備され、4月には皇太子殿下のご臨席を得て国際消防救助隊としての初の合同訓練が実施された。

国際消防救助隊の発足にあたって、その英語名と略称が消防庁内で公募された。長官提供の高級洋酒が賞品だということで筆者も応募したが、結局、木下英敏予防課長のIRT（愛ある手（Inter National Rescue Team of Japanese Fire Service））が採用されることとなった。

1986年8月には、カメルーン共和国のニオス湖有毒ガス噴出災害（死者1,700人以上）が起き、早速、国際消防救助隊員1名が派遣された。国際消防救助隊としての本格的な活動は、同年10月にエル・サルバドルで発生した大規模な地震災害（死者1,200人余）に消防庁の古内晋救急救助室長以下東京消防庁・横浜市消防局の総勢9名が派遣されたのが最初である。

この時の経験で、国際緊急援助の枠組みを定める法律が必要であることが痛感されたため、消防庁が外務省などに積極的に働きかけ、1987年9月、前出の国際緊急援

助隊の派遣に関する法律が定められた。

この法律に基づいて最初に国際緊急援助隊・救助チームが派遣された災害が、1990年6月のイラン北西部ルーダバル地震（M7.4、死者4万人以上）である。当時消防庁予防課の専門官だった私は国際消防救助隊の総括官に任命され、東京消防庁の鎌倉弘幸特殊災害課長以下5名とともに現地に派遣された。この時、警察チーム6名と山本保博先生率いる医療チーム6名も国際緊急援助隊として一緒に派遣され、当時NHKの記者だった山崎登先生（本誌編集委員、現国士舘大学教授）も同行取材で行動を共にしている。

※ この時の活動について興味のある方は、文末の拙稿（ネット検索可能）を参照してください。

INSARAG の評価

以後、国際緊急援助隊・救助チームは、今回の派遣も含めて22回の派遣実績を積み重ね、実派遣での経験や、搜索救助の国際ネットワークである国際搜索・救助諮問グループ（INSARAG：International Search and Rescue Advisory Group）をはじめとする国際社会の要請をもとに、機能拡充や活動内容の改善が図られた。

2001年にINSARAGガイドラインが国連総会で承認されたことから、日本の国際緊急援助隊も2010年にINSARAGが認定する外部評価（IEC：INSARAG External Classification）を受検し、「ヘビー級」の認定を受けた。ヘビー級は、2つの災害現場において同時に24時間、10日間連続して搜索救助活動を継続できるなど、高度な救助能力や、国際調整能力が求められる最高水準の認定レベルである。認定は原則として5年ごとに行われることになっており、日本の救助チームは、2022年に引き続きヘビー級の認定を受けている。

このように、日本の救助チームは、近年ではヘビー級の資格を持つチームとして、世界の都市型搜索救助活動（USAR：Urban Search and Rescue）をリードする役割が求められる実力を持つに至っており、成田から現地まで75時間を要した私の時とは隔世の感がある。今回のトルコでの日本の救助チームの超人的な活躍も、彼らにとっては当たり前のことなのかも知れない。

【参考文献】

- 1 イラン地震災害派遣消防救助隊の活動記録（近代消防1990年9月号）
- 2 イラン地震災害の状況と国際緊急援助隊の活動について（予防時報164、1991年）

（本誌編集委員）